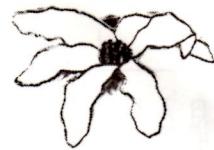


尾瀬の自然



(題字 初代環境庁長官 大石武一氏)

入山禁止の登山道にシュプール



尾瀬ヶ原から見た至仏山中腹のスキーシュプール。入山禁止
の登山道沿いに冬はスキーで自由滑走している。(1992年5月
3日、青木安弘撮影・関連記事6ページ)

尾瀬の自然を守る会

特別保護地区「尾瀬」における恒久的施設について

河内輝明

一、尾瀬入山者の現状

本会の入山指導等を通じて、近年尾瀬を訪れる人の状態・質を見ると、尾瀬に山・自然といった観念を持つて訪れる人の割合はきわめて低くなっている。もちろん、これはあくまでも割合であって絶対数ではない。入山者の絶対数は絶対に増えている。観光という目的で来る人の割合も確かに増えている。だがそれよりも目につくのは、「何なんだ」というタイプの人々である。

「何なんだ」というのは何をしに来たのかよくわからない人々である。観光かというとそうでもないようだし、単なるヒマつぶしなのか。特にマイカー利用者に多いタイプである。道があるからとにかくドライブがてら行ってみよう、といったところか。家族連れも多いが、親子登山といった風でもない。休日過多で、その使い方に困った末の単なる家族サービスなのか。山道で休んでいるハイヒール、スカート姿の人に、「どちらまで行かれますか?」と聞くと「尾瀬ぎます」

と答える。「尾瀬のどちらまで?」「この道を行くと尾瀬へ行きますか?」と切り返される。「ううう」といったところである。

最近の観光会社の尾瀬ツアーパンフレットはかなり整備されてきた。服装・履物・持ち物・ゴミの持ち帰り・湿原の保護・山小屋での禁止事項等々。したがってツアー参加者は見た目では上々である。しかしこれらの人々を連れてくる立場の添乗員は実に悪い。少なくとも、いざという時には人命救助の側にたつのである。にもかかわらず多くの添乗員は、服装は街中用だし、持ち物の小さなウエストバッグにツアーアクセサリ、それに旗だけ。ひどいのになると、普通の革靴、ハイヒール、中にはスカート姿である。

現在の尾瀬はこういった人々が大挙して押し掛けて来る。したがって、本当に尾瀬の自然を愛し、慈しみ、親しみ、いつまでも考える人は、せめて三年に一度にしよう、といふ具合になってしまふのである。

二、恒久的施設の現状
このような人々の押し寄せる昨今の保

護地区・特別天然記念物尾瀬地区内にて、種々の恒久的建設物の建設が盛んなようである。新築のものもあれば建て替えのものもある。これらの新築、建て替えは数年前からにわかに盛んになった。ここで、特に大きく問題としているところは、これらの新築、建て替えが、民間ではなく尾瀬の自然保護を中心となつて推進すべき環境庁、あるいは関係都道府県が率先するようなかたちで行われていることである。まず、環境庁は尾瀬沼畔といふ尾瀬の核心部ともいえる所において、コンクリート基礎に浄化槽を備えたトイレ及びビジャーセンターという恒久的施設を数年前に新築及び建て替えてしまった。理由は使用の頻度の増大、つまりここを訪れる人の増加に伴うニーズ増大である。そして、昨年度からは、山の鼻において保護管理センターの改築がはじまった。本機関紙でも周知のように、それまでの位置よりもさらに前に出し、より人目に近く、自然の景観の邪魔になり、かつ湿原により近いところに建設をしている。また、トイレも建て替えられ、さらにキャンプ場とし見晴十字路においては浄化槽の建設が進み、トイレも建て替えられ、さらにキャンプ場とし

ての機能も強化されつつある。

また、尾瀬沼北東沼尻では、湿原上で民間の休憩所も建て替えられた。さらに、尾瀬ヶ原中央北端の山小屋も大きく模様替えをした。もちろん環境庁の認可なくしては不得ない。

往きはよいよい……



鳩待峠で帰りのマイクロバスを鶴首して待つ入山者の群れ（1992. 6. 6 午後：高橋喬撮影）

ことである。今後このような建て替え、はさらに進むものと憂慮される。

確かに、核心部に休憩・宿泊施設があり、

また特別保護地区・特別天然記念物エリアたる「尾瀬」の中に立ち入るのに何等の規制もない（入り口にそれなりの看板はあるが立場、権限を有する人によるチェックはない）といつた現状の尾瀬では、核心部まで尾瀬の何たるかも知らずに来てしまい、これからどこへ行けばよいか迷っている前述のような人々へ

監視・管理とサービスは、この部分つまり尾瀬沼畔や尾瀬ヶ原湿原畔といった核心部においてしかできない。であるが故に、尾瀬を保護管理してゆくために、このような核心の施設、設備が不可欠な要素となってくるのであろう。しかし、尾瀬の自然の核心部たる、湿原も湖沼も自然としての性質はきわめてデリケートなものである。ちょっととした人の営みが自然に対して大きく作用するようなどころである。このようなどころに置くべき

施設は、当然必要最小限のものに留めるべきである。本会ではこの点を現在の尾瀬における最も大きな問題点の一つとして常に提起してきた。

三、尾瀬における恒久的施設の将来

環境庁の考え方があくまでも現状追随である。人が増えるから施設を新築・改築・増築するというものである。極めて無思想・無節操なものである。そして、何か問題点が生じると、とにかくそれだけを何とか解消しようといった、これも現状追随である。将来的に尾瀬をどのようにしていこうといったビジョン・理念はない。

確かに、現状においては現在ある恒久的施設はそれなりの価値・効果は持っているのであろう。しかし、この状態を放置すれも自然にとっての拡大悪循環になつてゆくことは自

明の理である。尾瀬地区内宿泊者を完全予約制にして地区内からの汚染源を多少抑えて、質的にみればより落ちる前述のような日帰り入山者への対策は全くなされていない。それらへの対策としてビジターセンターや保護管

理センターが施設されている、というのであるが、尾瀬の自然の何たるかを知らないこれら日帰りの人々は、行程の半分が終わるまでそこにたどり着けない。まさに「往きはヨイヨイ、帰りはコワイ」といった、古き悪しき日本がそのまま現在に残っている。

「コワイ」のは帰りだけでなく、往きも「コワイ」でなければ、デリケートな尾瀬の保護は実現できない。それには、入山者が尾瀬の地に足を踏み入れる前に必要事項を解説しなければならない。教育・情宣施設を核心部ではなく入り口に設置しなければならない。

そして、この入り口の教育・情宣施設において必要な知識・禁止事項等々を話し、入山者は納得の上で入山すべきである。とにかく核心部に近づいてきたが、やたらうるさいこと（禁止や制限）を言われるのでもういやだ、という入山者もけつこういる。お互いのこういった不快感をさけるためにも、教育・情宣施設は入り口に設置すべきであり、将来的には核心部からはこのような恒久的施設は撤去し、最小限の臨時施設程度にすべきである。

尾瀬の自然の保護のために、と設置されているものの自分が尾瀬の破壊へとつながっているのが現状であり、今までその破壊のための建物を拡大強化しつつある環境庁の方針は間違っている。ただし、将来的ビジョンを持ち、過渡的状態としてこれらの（一見）恒久的施設を暫定的に設置したというのならば、その将来的ビジョンを呈示することを要求する。

（指導部長）

「山と渓谷」一九八一年十月号



学生たちと尾瀬を歩いた青地晨氏

(青木三代子氏提供)

尾瀬への願い

青地 晨

ずいぶんと昔から尾瀬へ行きたいと思っていた。その思いをやつとはたしたのが一昨年（一九七五）の九月の中旬だった。同行一六人。こんな大人數になつたのは、私に足の不安があつたからだ。不安というのは私の肥満体（そのころ七六キロ）、二に年齢（そのとき七〇才）、三に肺気腫や肝臓の不調、四に登山経験ほとんどなし……などの悪条件がかさなつていたからだ。

私のゼミの学生たちに相談すると、ありがたいことにおまえが歩けなくなつたらおぶつて登つてやるといふ連中が十何人も名乗りをあげた。どうせ面白半分で本気じやなかろうと思つていたら、当日ほとんど全員が上野駅に集まつた。みな登山経験はほとんどないの素人集団だったから、ガイドを引きうけて下さつた「尾瀬の自然を守る会」の A さんがなによりの頼りだった。いはずなのだ。

私は若いときから自然キチガイの一人だったが、そのころ私の旧制高校には登山部なんて氣のきいたものはなかった。九州には一八〇〇メートル以上の山はない。登山部がなかったのは当り前かもしれない。その上、私一生運動にうつつをぬかし、とうとう退学さ

せられたくらいだから、山登りに縁がなかつたのはしかたがない。

しかし私の郷里には天山という一〇〇メートルちよつとの山があり、ここへは四、五回登つた。山頂は草原で、オキナ草の群落があり、このひなびた花にひかれたからである。イブキジヤコウソウがあるといふ山にも登つたが、見つけだすことはできなかつた。このころから私は、草木に目がなかつたのだろう。

さて前説はこのくらいいにして、尾瀬への取つかかりは沼山峠をえらんだ。このコースなら老人でも大丈夫と同行の A さんがタイコ判をおしたからである。たしかにらくなコースだつたが、鬼怒川から七時間ちかくもバスにゆられる。これは活力にあふれた若い連中には忍耐の限界だつたらしい。しかしバスの窓から田畠や山林などをながめてさえいれば、私はご機嫌な人間だから結構たのしい思いだつた。

沼山峠から尾瀬の湿原へ下り、生まれてはじめて木道を歩いたが、木道の歩き心地はなかなかよかつた。しかし湿原の花の季節は過ぎていて、ニッコウキスゲは一輪も見あたらなかつたし、純白のワタスゲも見ることができなかつた。わずかにサワギキヨウの花の群落が草原のところどころに散らばつていたし、長蔵小屋の水飲み場に二、三輪のヤナギランが咲きのこつていた。草原全体からいえば、ワレモコウの季節だつたといえるかも知れない。

いや、もう一つある。トリカブトの青紫色の花が、秋の陽を照りかえすほど鮮やかに咲いていたことだ。しかしアイヌが熊狩りの矢じりに塗つたという猛毒の植物は、残念なことに尾瀬にはそうたくさんはなかつた。私はこの青とも紫ともつかぬ強烈な花の色が大好きで庭に栽培してみたのだが、夏の日照りに耐えることができなかつた。北海道の山野に多いトリカブトは、やはり東京の暑熱には無理だつたのだろう。

以上のように尾瀬の花の盛りは去つていた。しかし紅葉の季節にはまだ早いという中途はんぱの季節に、私たちには尾瀬をおとずれたらしい。この時期をえらんだけは、誰でもない私だつた。尾瀬のことはろくすつぽうしない男が、仕事の都合だけでこの時期をえらん

青地 晨 (あおち しん)

本名・青木滋。1904(明治42)年富山県に生まれる。生後6カ月で佐賀県に移る。旧制佐賀高校時代にストで放校処分を受け、その後文化学院に学ぶ。38年中央公論社入社。42年編集次長を最後に退社。44年1月横浜事件に連座、獄中生活を送る。45年10月世界評論社設立、初代編集長に。52年頃から青地晨のペンネームで執筆活動を開始。人物論、ルポ、現代史等幅広い分野で活躍。73年金大中氏拉致事件以来、日韓運動にかかわり、74年から日韓連帯会議代表として活躍

する。その他、自然保護、冤罪運動等にかかわり、晩年は市民運動を支え、ジャーナリズムの後進の指導に専念。84年、75才で逝去。

主な著書に「魔の時間」「冤罪の恐怖」「免田栄獄中記」「ルポライター入門、正・統」など。

『尾瀬への願い』

初出…『山と渓谷』1981年10月号

単行本…『同じことをみずみずしい感動で

言い続けたい』(社会思想社、1987

年9月刊)に収録。



だから…める。私は同行の学生たちに悪いなあと思つたが、ありがたいことに誰も文句をいわなかつた。来年、ニッコウキスゲの花ざかりにまたやつて来ようやと私は約束したが、過労から夏の肺炎にかかって、約束を守ることができなかつた。やつとそれを果たしたのは今年の八月だが、あのとき同行した学生たちはあらかた勤めをもち、数名だけしか尾瀬行にはくわわらなかつた。

花の季節はすぎていたが、私は初めて見た高地の湿原にすっかり満足した。尾瀬の湿原は花がなくとも実際に美しい。私は尾瀬を見るまで、北海道の湿原に似たものを想像していたが、ノサツゴンなどの湿原は人の背

が…れるほど夏草が生い茂つていた。

ザワギキョウの花を初めて見たのはノサツゴン岬の湿

原だったが、尾瀬のザワギキョウの草丈はその半分く

らいしかない。この土壌も瘦せているのではないか。

尾瀬の美しさは、瘦せた寒冷の土地に草丈の低い植物

が薄緑にひろがつていてことだろうと私は思う。

高温多湿、おまけに土が肥沃な風土では、草木は繁り、緑の色もくろずんでいる。草いきれという日本の言葉は、こうした草木のさかな勢いをあらわす言葉なのだろう。ところが私の美意識は、高温多湿、いかにも生産力の高そうな日本の草木を好まない。少ない雨と痩せた土、太陽の光にもめぐまれぬ北欧などの草木がより好ましく見えるのだ。こうした風土の草木はくろずまず、いつまでも薄い緑の美しさをたもつてい

る。

そういう条件を国内に求めれば、一〇〇〇メートル以上の高原しかないのではあるまい。尾瀬は以上の条件を満たすだけでなく、日本で最も広大な湿原であることはいうまでもない。

なんだか独り合点の議論をおしつけてしまったが、どうか尾瀬キチの言葉としてゆるしていただきたい。こんど夏の尾瀬へやつてきて、花ざかりのキスゲもよかつたが、尾瀬ガ原に点在する小さな沼、その水面に浮かぶヒツジグサの葉の美しさに心が動いた。静かな水面は空や雲をうつし、コウホネの金色の花、ヒゲグサの白く小さな花を静かに浮かべている。こうした小味で、きめのこまかい美しさは無類だとしみじみ思つた。それに薄緑のような朝もやが漂つている尾瀬の影絵のような美は、前回にきたときは気がつかなかつた。

初秋と盛夏の尾瀬それぞれの美しさを私は味わうことができたが、今年の秋は紅葉と枯れ草の尾瀬を見たし、来年の初夏にはミズバショウの尾瀬がみたい。ゆっくりと数日間を沼のほとりで暮らしたいと思う。健康であれば、ささやかな私の願いは近くはたされるとやう。そして平野長蔵、長英、長靖と長蔵小屋三代の足あとや、その妻たちの暮らしも書いてみたい。私の健康さえゆるすならば……。

キャンプの全面禁止を

—冬期利用状況報告—

梅山久夫

尾瀬の冬期利用実態調査を始めてから、今年で4回目になる。

五月三日、鳩待峠から至仏山の途中までと、峠を下つて尾瀬ヶ原の竜宮小屋まで入った。調査団員は、福島から荻野、東京から青木、徳光、群馬から平井、奥本、松本、竹沢、広岡、梅山の計九人が、参加した。

当日は早朝小雪が降り、戸倉・鳩待峠の関越バスの始発は、チケットを付けて運転をしていた。今年の冬期通行止め解除は、四月二十九日。今年は例年より雪が少なく、尾瀬ヶ原の陽当たりの良い所では、木道が顔を出して、一部ではかわいていた。

峠の付近や至仏山では、積雪が二メートルもある。冬山の状況である。にもかかわらず、ミズバショウが咲いたと誤解して、地図も雨具も持たず、スニーーカーで入り込んだ軽装ハイカーの姿が目立つた。峠の入口に、ミズバショウ案内や積雪状況などの入山情報を正しく伝える案内板を設置してあれば良いと思う。

鳩待峠の駐車場は満車になり、道路には、マイカー約百三十台が路上駐車。シーズン中と変わらない有様であった。この時期の至仏山スキーの常連もいて、頂上から山の鼻へのスキーを楽しみに来ているのである。立ち入り禁止区間を積雪期に、ハイカー・スキーリ

先人たちの訴えを提言に見る

波戸場秀幸

古書店で高価の『尾瀬』（川崎隆章・平野長英）、「尾瀬と日光」（武田久吉編）や、これまで高価な復刻版の『尾瀬と檜枝岐』（川崎隆章編）を購つた頃は、流し読みした程度で長らく書架で背だけを見ていた本を、最近になって尾瀬の現状を頭に置きながら読み返してみた。

尾瀬の自然を守る会が「提言」を一九八五年六月に、続いて尾瀬を守る懇話会が「提言」を一九八八年五月に、そして尾瀬の自然を守る会が「マスター・プラン」を発表し、尾瀬の自然保護を訴えてきた。尾瀬の自然を守る会の会報「尾瀬の自然」第五十八号で、日本自然保護協会理事の水野憲一氏は、「尾瀬ができる限り原正の状態に戻し、教育的な利用のみに限定して行く」という提言のマスター・プランは、環境庁の専門家たちをはじめおおくの自然保護関係者から評価されている」と評している。

これらの「提言」が発表された当時、「入山料」問題で、多くの方々から賛否両面からのご意見を戴き、世論を沸かせた。提言の内容についての賛否はともかくとして、尾瀬の自然保護問題に対する多くの人々の関心を呼び起こした点では一定の価値を持つもの、

価値することができよう。これら「たたき台」とも言える「提言・マスター・プラン」は、最終的には国民的コンセンサスを得た上で実施されなければならない問題であろう。今、読み返している書物の中に、古くから尾瀬を愛し、尾瀬と深くかかわった先人たちの訴えを目にし、「今なぜ尾瀬なのか」を想起してみると、

図書文献に見られる尾瀬に係る多数の先人たちと多くの訴えや提言は、数限りないほど目にすることが出来る。可能な限り多くに触れたいが、紙数の関係で二・三に止めざるを得ないことを断つておく。

I. 尾瀬と日光

（武田久吉 編）……山溪選書3……

山と渓谷社・一九四一年（昭和十六）八月十日発行・二円三十銭

尾瀬の科学の項で安達成之氏は、次のように記している。

(1) 学術的・基本的に研究する為、国立尾瀬科学研究所を設立し、その設備を充実し、学者を完備し、これを総動員して、もっと真剣な研究を考慮すること。文部省の一回限りの研究報告で終末とせずに、更に大なる理想の

ヤーは頂上から原へ下山してくる。

山の鼻キャンプ場は、五十張りほどのテントがあり、混雑してにぎやかである。雪の上にはゴミ等が放置されていた。積雪期の尾瀬まで来て、キャンプの必要があるのだろうか。

尾瀬の山開きは、五月下旬である。

守る会としては、「早春の尾瀬は、本来は休養期間であり、入山を自粛すべきだ」と主張しているが、早急に実施すべき対策は①山開きまでは戸倉・鳩待峠間のマイカー乗り入れを規制②至仏山頂上・山の鼻間の立ち入り禁止区間を標識・ロープ等で表示する③尾瀬地区のキャンプの全面禁止の三点であろう。年間五十万人も訪れる尾瀬を、山開き（五月下旬）までの間は静かな環境にしておくべきである。山開き前の山小屋・売店等は営業の自粛を考えてほしい。

（保護部幹事）



山の鼻キャンプ場には約50張りのテントが

（92年5月3日午後・梅山久夫撮影）

下に、基本的・組織的研究機関の設立を望む。

② 大衆の科学的共用の場として、生きた活用方法の考究である。それに、尾瀬探訪者の為に、手頃の科学案内書と、適当な案内者の養成である。この両者がなければ、折角尾瀬を尋ねても、宝の庫に入つて手を空しうして帰ることになる。これも國家なり地方なりの大きな力で企画して欲しいものである。

この訴えを「マスター・プラン」に見よう。

（二）尾瀬の保護

- ④ 尾瀬自然保護研究所（説明略）
- ⑤ 尾瀬自然保護博物館（説明略）
- ⑥ 尾瀬自然保護指導員養成所（説明略）
- ⑦ 自然保護指導員（説明略）

II. 尾瀬と檜枝岐

（川崎隆章 編）

那珂書店・一九四三年（昭和十八年）二月十一日発行・十円

尾瀬雜記として小暮理太郎氏は、「かくも景勝の地である尾瀬が、日光と共に国立公園に指定されたのは、当然の事である。しかし、心ある人を躊躇せしめた尾瀬ヶ原貯水池問題は、その為に首尾よく解消したとも思われないのは訝しき限りである。願わくは尾瀬は有るが何んの姿で保護したいものである。徒に外国人の真似をして、池さえあればボートを浮べ、公園でさえあれば自動車道を作らなければならぬとは限るまい。せめて一箇所や二箇所位、自然の姿の姿を労して楽しむ場所として残して置いてもよからうと思ふ。これは国の恥でなくして反つて誇りであろう。今の若い婦人や青年達に適当な歩行が何の苦痛であらうぞ」と訴えている。

これに連なる「マスター・プラン」として、

五、保護とあり得べき利用の形態

（三）基本的な利用形態
① : 略: 尾瀬の利用の形態として、單な

る観光地として使つてしまふのでは、貴重な自然の損失につながる。略: 尾瀬は単なる観光地として企業・業者の営利の使途に供するのではなく、学術・教育の場としての利用を第一として位置付ける事が挙げられよう。

III. はるかな尾瀬

（朝日新聞社前橋支局編）

実業之日本社・一九七五年（昭和五〇年）五月三〇日発行・一五〇〇円

第四部「あるべき姿」の項の中で、尾瀬駐在 渡辺レンジャーハは、「ブナ平は普通地域でなく特別保護地区に」と例示しつつ「特別保護地区の拡大を」主張、「どこでもいいんだけど有名だから何となく来た」ではなく、

「本当に尾瀬のよさのわかる人だけが……来るべき」と訴え、更に、「登山口に関所を：ここで入山規制とオリエンテーションを」と、提言している。

西丸震哉氏は、「荒らさず、謙虚な気持ちで、入山規制は止むを得ない、戸倉で規制を」と述べている。

群馬県教育委員会文化財保護係長の磯貝福七氏は「尾瀬の自然保護の基本方針は、天然の推移にまかせること。行政の複雑さを何とかし、一本化しスッキリすべきだ。入山の徒步のアプローチを長くすることが規制となる。尾瀬が破壊されたときが、日本の自然がダメになるときと言える」と、訴えてい

尾瀬の自然を守る会の会員のみでなく、多くの尾瀬に関心ある人々、多くの尾瀬に関係する人々に、これら先人たちの「訴え」や「提言」と併せて、尾瀬の自然を守る会の「提言」・「マスター・プラン」や、尾瀬を守る懇話会の「提言」の真意を読み取つて戴きたいと願わずにはいられない。

（研究部長）



第13期講座修了者に
終了証を渡す内海代表

館長)

(上13名)

合計三五万一五〇〇円

今年もマイカー規制

御池・沼山峠口間

沼山峠口間は、交通渋滞緩和と自然保護のため、週末などを中心にマイカーの乗り入れが規制される。規制期間中は御池駐車場までしか入れない。規制日は表のとおり。

御池・沼山峠口間 マイカー規制日	
7月18日(土)	午前6時~19日(日)午後2時
24日(金)	午後6時~26日(日)午後2時
31日(金)	午後6時~8月2日(日)午後2時
8月8日(土)	午前6時~9日(日)午後2時
12日(水)	午後6時~16日(日)午後2時
9月19日(土)	午前6時~20日(日)午後2時
10月2日(金)	午後6時~4日(日)午後2時
9日(金)	午後6時~11日(日)午後2時

群馬県側も規制強化

群馬県は五一十月の観光シーズンのうち、入山者の多い週末や祝日に津奈木・鳩待峠間でマイカー規制を実施してきましたが、ことしは一段と強化する。夏と秋の規制期間は

次とのおり。

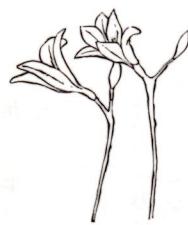
①七月十八日~八月十六日
(三十日間)
②十月八日~十一
一日(四日間)。

第13期指導員養成講座終了者(順不同・敬称略)

菊地誠一(高崎市・教員)	廣岡勇(同・JR)星野良一	(前橋市・銀行員)湯浅高行
(同・歯科医)神戸朋子(藤岡市・公務員)吉崎照二見	(同・公務員)関口昭雄(伊勢崎市・塾経営)伊藤慈子	(同・12期)栗原宏行(群馬県大泉町・会社員)小林礼三
青木薰(沼田市)ハロルド・ソロモン(東京・大学講師)	山田茂雄	高間徳子
大塚一二(磐城市・民族資料館長)	星壇岡野一弥	福田久子
鈴木淑恵(東京)	岸好人	堀米義
高橋治	山田鉢	木俣陽吉
川	山田鉢	山田鉢
純子(群馬)	鈴木敦子(大阪)	日塔貴昭(神奈川)
菊池満理子	石川章典(茨城)	日塔美美
(埼玉)	高橋治(宮城)	日塔貴昭(神奈川)

スタッフ募集!

尾瀬の自然を守る会では、事務局・会計・編集等のボランティア・スタッフを募集しています。各担当部長・幹事までお問い合わせください。



■カンパの報告

左記の方々からカンパを頂きました。厚くお礼申し上げます。(順不同・敬称略)

まきました。厚くお礼申し上げます。(順不同・敬称略)

△ところ喫茶室「ルノアール」四谷店

P.M.7時~8時

JR四谷駅前 電話 (03)

3351-1052

(コーヒー代が必要です)

8時からは軽く焼鳥屋でと

考えています。(編集部)

会報「尾瀬の自然」を材料にして尾瀬を語り、よりよい会報をつくるためご意見をいただきたく、左記により開催します。ご参加ください。

記△とき 8月21日(金)

▽ところ喫茶室「ルノアール」四谷店

P.M.7時~8時

JR四谷駅前 電話 (03)

3351-1052

(コーヒー代が必要です)

8時からは軽く焼鳥屋でと

考えています。(編集部)

新入会員

(七月二日現在)

事務局例会

毎月第2土曜日に東京農大務局例会は、入山者指導などで各自多忙のため六、七月は休会しましたが、八月は開催の予定です。

(総務部)



たむしば

◆6月6日、久々に尾瀬ヶ原

で入山者指導。鳩待峠では岸

(東京) 山田(群馬)の両氏

が早朝からゴミ袋を配ってい

ました。頗もし。福島側に

比べて全般に入山者のマナー

は良い印象だったが、三脚を

湿原に立てる自称・名カメラ

マンが多い点は共通。三脚を

持参していたら要注意◆それ

にしてもオバタリアンがふえ

た。オトメチックな服装で、

日焼けを防ぐためかお化粧が

濃い。日焼けが怖いのだった

ら、尾瀬なんかに来るな!と

いいたかった。◆依然、原稿

の集りの悪いのに苦労してい

ます。出張中でも、会報のことを考えると、気が滅入ります。

助けて!(T)

公開編集会議のお知らせ

会報「尾瀬の自然」を材料

にして尾瀬を語り、よりよい

会報をつくるためご意見をい

ただきたく、左記により開催

します。ご参加ください。

記△とき 8月21日(金)

▽ところ喫茶室「ルノアール」四谷店

P.M.7時~8時

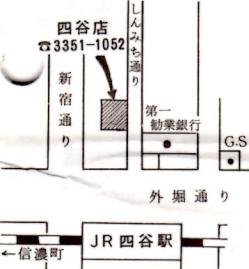
JR四谷駅前 電話 (03)

3351-1052

(コーヒー代が必要です)

8時からは軽く焼鳥屋でと

考えています。(編集部)



尾瀬の自然 第61号

発行 尾瀬の自然を守る会

発行者 島村恭敬

事務局 高橋喬

電話 03-3425-4481 内43

区桜三一三十三一一 東京農業大学第一高

学校生物教室内

4351-1052 新宿通り 信濃町 JR四谷駅 外堀通り

Yotsuya Station JR Yotsuya Station